
無心少女

猫モドキ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無心少女

【Nコード】

N74540

【作者名】

猫モドキ

【あらすじ】

全ての始まりの事件。

その1、無心少女

『この話は、全ての始まりとなった事件の話
被害者の少女はいつも無表情だった。
これは彼女のコンプレックスだった。
そんな彼女を好きになった少年がいた。
彼女と彼は、出会ったことで幸せになった。』

修学旅行シーズン、うちの高校もその流れに乗って三年生が修学旅行に行く事になった。
・・・つまり、私は彼、綾崎翼あやさきつばと数日の間会えなくなってしまうのだ。

「修学旅行、何所に行くの？」

「沖縄、だつたかな？お土産は何がいい？」

沖縄、沖縄沖縄沖縄……ぷしゅー、思考停止。

「おーい、大丈夫？」

「だ、大丈夫…なんでもいいよ、沖縄とかよくわからないから」

「わかったよ、ゆずに合いそうな物を買ってくるよ」

ゆず…私のあだ名、それを彼が呼んでくれるだけでふわふわした気持ちになる。

「翼、いっぱい楽しんできてね」

「わかってるよ、でもゆずがないと寂しいなあ…」

「うみゃ!？」

こんな惚気の様な…実際惚気の会話も私達にとってはいつも通りの会話。

「ゆず、また帰ってきたらデートしようね」

「え?あ…もう家だつたんだ。うん、勿論」
そういつて彼と別れた。

これが最後になるとも知らずに…。

次の日。

「…ねむ」

いつもより遅い登校、そしていつもより眠い。

周りの生徒の喋り声は当たり前前の様に流れてゆくし秋というのはとても過しやすい季節だ。

はつきり言つて、何時地面に突つ伏して眠つてもおかしくない。

その時、誰かに肩を叩かれた。

「先輩、こけますよ？」

「え?...あ、ホントだ…ありがと、雫ちゃん」

誰かと思えば一つ下の後輩、神原雫であった。

よくわからないけど、私に懐いてくれている可愛い後輩ちゃんであ

る。

「先輩、聞いてくださいよ！今日家庭科の調理実習でケーキ作るんです！！」

「あー、私の時はクッキーだったなあ」

「ココアクッキー、彼が好きな味である。」

「ココアクッキー作っただんでしょ？」

「うお、バレた」

「ふふふ、ケーキ先輩食べてくれますか？」

「食べるよ、お兄ちゃんの分も残しておいてあげなよ？」

「えー、どうしよっかなー？」

後輩ちゃんには私と同じ歳のお兄さんがいる、名を優雨^{ゆう}という。

「あ、おはよー」

「お、噂をすれば」

「お兄ちゃん遅いよーん」

神原（兄）の登場である、そして何時の間にか下足である。

「お前が起こさないから遅くなったんだ！！」

「いだだだだだあ！！」

神原（妹）の頭をぐりぐりする神原（兄）

「ほら、さつさと教室行け！」

「はあーい、じゃあまた放課後会いましょうね！あつ、そうだ！！」

また会おうと行ったばかりなのにくるつと戻ってくる神原（妹）

「先輩！手、出してください。グーで！」

「？・・・こうでいいのかな？」

言われたとおりに出す。

「今からこの手に魔法を掛けます！1、2、3！！」

ギューっと手を握られた後、手を開いてくださいって言われた。

「・・・わあ」

手には、何故か飴玉があった。

「プレゼントです！じゃあまた放課後！！」

そして嵐の様に去って行った。

「マジシャン？」

「そ、あいつ将来はマジシャンになるーって言って聞かないんだよ……」

少し呆れながら言う優雨君。

「でも優雨君も将来の夢作家じゃん、雫ちゃんの事いえないでしょ」
確かに、と苦笑しながら私の数学の宿題を移す。

「あー、数学分からん。」

「雫ちゃんは完璧じゃん」

「あいつは理数系なの、文系の友達の古典の宿題とかしてもらってるらしい」

結局神原家は兄も妹も友達に頼るらしい。

「あ、いたいた」

明らかに私に向けての声、振り返ると見知らぬ男子がいた。

「今日の昼休み、理科室に来て欲しいんだけど……」

「別にいいけど……」

「よかった！じゃあ！！」

……嵐第二号が去って行った。

「知り合い？」

「いや、知らない人だよ」

優雨君の知り合い？と聞くが帰ってきた答えはNoだった。

「綾崎先輩の知り合いか？」

「翼、陸上部だったな……あの人陸上部？」

「分かんない、綾崎先輩が雫の事かもな」

雫ちゃん狙いの男子か……？

あつという間に昼休みになった。

5分くらいでお弁当を食べて理科室に行く。

廊下を歩く（何の話があるんだろう）

階段を下りる（そもそも、翼と雫ちゃんのどっちの知り合い？）

理科室が見えてきた（というより、何故理科室？）

理科室の扉を開けた（そういえばあの人・・・理科の作品で表彰されてたような・・・）

「先パーイ！いますか！？」

教室に台風こと俺の妹がきた。

「残念だけど、呼び出し受けててさっき出て行ったぞ」

「そっかぁ・・・残念。何所に呼び出されたの？」

この時、何で俺は雫に場所を教えてしまったのだろうか・・・

それ以前に、何故ゆずを止めなかったのだろうか・・・

「理科室だ」

「了解！あ、これお兄ちゃんの分のケーキね」

去り際に何か飛んできた、受け止めるとシフォンケーキだった。

その2、3分後・・・

爆発音が響き渡った。

先輩のいる理科室を目指していた。

作ったケーキは結局お兄ちゃんの好きなシフォンケーキにしたけど・

・先輩はケーキ全部好きだし大丈夫な筈だ。

先輩を見つけた。

この時、呼び止めておいたら、何か変わったのだろうか・・・

驚かせたかったから、少しずつ近づいていった。

先輩がドアに手をかけた、私は声をかけようと走る。

ドアが開いて、爆発した。

その1、無心少女（後書き）

続きます。

誤字脱字あれば報告してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7454o/>

無心少女

2010年11月6日16時37分発行